

子どもの理解能力を育む絵本の役割 — その継続性と発展性

The Roles of Picture Books Enhancing Infants' Understanding - Their Possibilities and Continuity

清水 美智子

Michiko Shimizu

目次

- I. 研究の背景
- II. 研究の目的
- III. 研究の方法
- IV. 分析の結果
- V. 考察
- VI. まとめ

I. 研究の背景

「賢い子に育てるためのマニュアル書はありませんか」

あるとき、一人の母親が「学校では教科書があって先生が理解できるように教えてくれました。会社に勤めてからは先輩がお茶を出すタイミングから電話の応じ方まで教えてくれました。指示に従っていれば万事うまくいきました。でも結婚して子どもが生まれ、子育てはどうしていいのか皆目わかりません。具体的に書かれた『子育てのマニュアル書』はありませんか」と訊ねてきた。「わかりやすく書かれた育児書はありますが。お母さんの悩みにそのつど具体的に答えてくれるマニュアル書はありません」と答えた。

その時、絵本は子育てのマニュアル書として活用できるのではないかと。そして、絵本は読み聞かせを通して子どもの理解能力の育み、さらに母親の子育て支援として活用できるのではないかと思った。

II. 研究の目的

人はことばでものを考え、ことばで思いを伝える。よって、理解能力を育むには意味のわかることばの獲得が必要である。そこで、乳幼児期の絵本の読み聞かせとことばの育みの関係性。さらに絵本の活用と理解能力の促しとの関係性など、その過程の追跡を研究の目的とする。

Ⅲ. 研究の方法

読書記録からの分析

物語絵本及び知識絵本の継続的な読み聞かせから、理解能力の成長過程を以下の3段階に沿って確認を試みる。

第1段階、0・1・2歳児における絵本遊びからの理解能力の確認。

第2段階、2・3歳児の語彙量に沿った読み聞かせからの理解能力の発展性。

第3段階、4・5・6歳児の一人読みへの準備段階としての読み聞かせの発展性と継続性。

以上のように、絵本遊びから、絵本の読み聞かせへ、さらに、一人読みへと続く絵本とのかかわり方がどのように読解力を促し理解能力を育むか、その過程を平成6年生まれの女児Mの生後3カ月から6歳までの読書記録からその推移の確認を試みる。

また、乳幼児の理解能力の成長過程がMだけに限られた特別の傾向なのかどうか、同年齢の他児童の成長傾向と対比させながら検証を試みる。

1) 物語絵本の継続的な読み聞かせによる理解能力の成長過程の確認

第1段階 0・1・2歳児における絵本遊びからの理解能力の確認

○ 新生児の絵本とのかかわりと育ち

生後3ヶ月～7ヶ月頃の絵本遊びの反応から、乳児期の理解能力の状況。

事例1. 『ぼぼぼぼぼ』偕成社

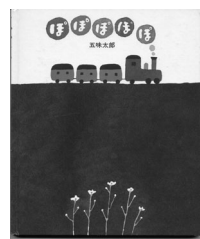
生後3ヶ月からのMへの絵本遊びによる読み聞かせ。

この絵本はすべて一音の繰り返しで書かれている。同じリズムで繰り返される音の快さがMの意識を絵本に向かわせる。

リズムカルに読みながら絵本の中に描かれている動物を指差し「ぼ～ら、牛がいますよ～」「狸が汽車ぼっぽを見ていますね～」などと話し掛けていると、しだいにMは意志を見せ始める。母親がいつも指差して読むところにくると「あ・あ」と声に出し、手で絵本をぺたぺたと叩きながら指差すしぐさを見せる。

トンネルに入る前の客車は3両つながっている。トンネルの中で一両が外れ、トンネルから出て来た客車は二両となっている。

トンネルに入る前のページで三両あることを「いち・に・さん」と指でなぞって遊び、2両の絵で「いち・に」となぞっていると、そのページに来ると、客車の上に手を置いて、絵本をパンパンと叩いて遊ぶようになった。一歳の誕生日を迎える頃には、母親と絵本で遊ぶ楽しさが身につく、他の絵本でも母親の促しに導かれ絵本遊びを楽しむ様子を見せるようになった。乳児期からの絵本遊びがMの絵本への好奇心を育てている。



○ 語意の把握を促す絵本遊び — 体験を伴った絵本の活用 —

絵本に描かれた事物から名詞を、現象から動詞や形容詞などをことばにして語りかける。絵本を読み聞かせるのみではなく体験を通すことによって、乳幼児は語意を把握したことばを確実に獲得する。

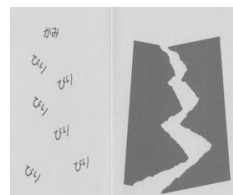
事例 2. 『じゃあじゃあびりびり』 偕成社

レストランなどで氷水が出されたときなど、コップを自分の頬に当て「お～、冷たい！」と、「冷たい」を強調し、次に子どもの頬にコップを当て冷たさを頬で体感させる。このように日常生活体験にことばを添えることによって、子どもは効果的に意味を把握したことばを獲得していく。



水に興味を示しはじめた M に、偕成社『じゃあじゃあびりびり』を 1 ページから繰り返しリズムカルに読んでみると、絵本に描かれたことから（現象）と文字（ことば）に馴染んでいく。

次のかみびりびりのページでは、目の前で紙を破って見せ、「びり、びりって、音がしましたね、もう一度、破りますよ」と、再度紙を破って見せ紙はびりびりという音と共に、二枚に分かれることを確認させる。「もう一度、聞いていてね」と、こんどは紙を丸め、「がさがさって、音がしましたね」と紙を手の中で丸め、「まん丸になりましたね」とことばを添えながら転がして見せる。紙という素材は破れて二枚になったり、球体に変化したりするのだということを絵本遊びを通して好奇心に働きかけ記憶に残していく。

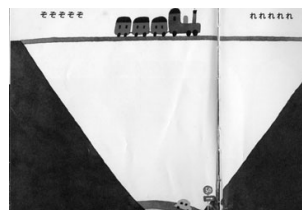


上記の事例は M 以外の同年齢の多くの子どもが同様の反応を見せる。破ったり転がしたりする働き掛けが自発的な確かめ行動へと発展していく。その時、遊びに使ってもいい紙と破ってはいけない大切な紙があることを丁寧に指示していると、この年齢期の子どもは「この紙は破ってもいいかいけないか」を確認するための認視行為をするようになる。これも絵本遊びからの子どもの成長を促すアプローチとなる。

○ 継続性が育む把握能力

事例 3. 『ぼぼぼぼぼ』 偕成社

M は 3～4 ヶ月の頃から継続的に絵本『ぼぼぼぼぼ』を読んでもらっていた。1 歳 6 カ月の頃、遊園地内を走る遊具の汽車に乗った。汽車が鉄橋をわたっていた時、鉄橋の下をゴーカーが走っていた。その時、M が母親の膝で「ぞぞぞぞぞ」と声に出した。この時、M は右の絵と同様の状況にいた。



上記の事例から、今、体験している状況と、いつも読み聞かせてもらっている絵本の一場面が同じ状況であるということが、1歳～2歳の子どもに理解できていることが確認できる。

話し始める前の子どもたちには視覚によって確認する認視行動がよく見受けられるが、このことから1歳～2歳の視覚の発達と把握力との関係性が育っていることが確認できる事例と言える。

第2段階 2・3歳児の語彙量に沿った絵本の発展性

○ 継続性の中で成長していく絵本の読解力を促す「絵を読む力」

2歳頃から幼児向けの簡単なストーリー性のある物語絵本が聞けるようになってくる。絵本遊びの次のステップとしては、物語絵本の絵を読む活用のあり方が可能な段階に入る。

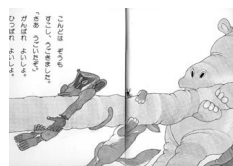
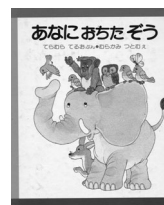
事例1. 『あなにおちたぞう』 偕成社

チョウの舞う早春の野原をゾウの子どもが散歩している。チョウを見て



ていたゾウは足元にあった大きな穴に気付かずに落ちてしまう。「助けてくれ～」と叫ぶゾウの声を聞きつけて、猿がやってくる。キツネ・カバ・

サイが次々とやってきて皆でゾウの鼻を引っ張る。左の上の図ではサイ・カバ・キツネが描かれているがサルの姿がない。しかし「よいしょ よいしょ よいしょ よいしょ」と、掛け声は4回書かれている。4回目の「よいしょ」をキツネの前（絵本の外側）を指さして読むと、Mは「キツネの前に誰がいる」と予測し、記憶をたどり、サルに気付く。何回も見てきたサルの表情を思い描きながら記憶を呼び覚まし「おサルさん」とつぶやいた。そして、次のページ（左下の図）でサルの姿を確認すると、記憶の正しかったことに「ほら！」と言わんばかりににっこりと笑った。



絵本『あなにおちたぞう』は子どもの感性や記憶力などへの働きかけが随所に仕掛けられている。右上のゾウが穴の中で泣いている場面では、どれほど深い穴に落ちたのか子どもの不安を駆り立てるような仕掛けとなっている。子ども達はそれらの仕掛けから絵を読む力を身につけ、絵が物語る状況から登場する動物たちの気持ちに気付き共感する力をつけていく。

第1段階の事例1、事例2、事例3から0・1・2歳児への絵本遊びが乳幼児の読解力を育む基礎となっていると考えられる。

事例2. 生活の中での理解能力の育ちの現れ

M (2歳前後) ことばが出始めた頃、母と祖母の3人で美術館に行った。Mは母親が観賞している間、隣接された公園で祖母と遊んでいた。祖母がいたずら心から鬼瓦のモニュメントに手を入れ「Mちゃん助けて。手が抜けなくなっちゃった」と叫んだ。するとMは必死に祖母の手を引っ張った。その真剣さに祖母は手を抜き「あぁ、怖かった。ありがとう」と伝えた。するとMは祖母の手を引き大急ぎでモニュメントから離れ、祖母が気づかずに再度モニュメントに近づくと「だめ!」と、たどたどしいことばで注意した。

この事例から2歳前後の幼児に、今、自分がしなければいけないことを行動に移し、さらに注意力が持続していることが確認できる。絵本の読み聞かせによる理解能力の発達が暮らしの中に表出した事例と言えるのではなかろうか。

○ 共体験からの主題の把握力

3歳前後の子どもの多くは登場人物に自分の気持ちに移入し、物語の世界を共体験することが出来るようになる。登場人物と同じ行為を遊ぶことで主題を身体で読み取っていく。

事例3. 『いいたくない』ひさかたチャイルド

仲よしのクマとウサギが喧嘩をした。クマは「ごめんねなんて いいたくない」と意地を張る。だんだん淋しくなったクマは「そうだ ごめんねは きょういおう」とウサギに謝りに行く。

いいたくない



この絵本を読んでもらったM (3歳) は理由もなく妹の頭をペチャリと叩き、「ごめんねなんて いいくな」と笑いながら言った。就寝前に「ごめんね」と言うだろうと思っていると、その通り夜布団に入る前に「今日の ごめんねを 明日 言いたくない。Aちゃん ごめんね」と、詫びる遊びを楽しんでいた。

また、あるとき男の子が「ぼく、夜行列車に乗ったよ」と言った。「そう。誰と乗ったの?」と聞くと、「知らない人たち」と答えた。「夜行列車に乗ってどこに行ったの?」と訊ねると、黙って夜行列車の絵本を持って来て、床に置き「ほら!」と、絵本に描かれた列車に乗り込んだ(絵本の上に上がった)。

子どもはこのように絵本を遊びに取り入れ間接体験していく。そして、実際にプラットホームに電車の入ってくる様子や電車を体験をすることによって、次にその絵本を読んでもらう時には、プラットホームでの五感からの体験を重ね絵本を楽しむ。

3歳前後の子どもは絵本と実体験を行ったり来たりしながらイメージの幅を広げ理解能力を育てていく。このような読書体験を重ねる絵本遊びから、暮らしの中で得た情報を絵本にバックアップさせ読解力深める段階へと発展していく。

乳児期から絵本に親しんできた継続が手当たりしだいに選書するのではなく興味を持った分野のその先へと向かう自主的な絵本の選択力を育てていく。

これらの現象はどの子にも見られ、M だけに見られる特別な発展性ではない。

第3段階 4・5・6 歳児の一人読みへの準備段階としての絵本の選択と扱い

○ 自己へのメッセージ としての主題の把握

継続的な絵本の読み聞かせの中で主題の読み取りを深めてきた子どもは、物語の主題を自分へのメッセージとして受け止められるようになる。

事例1. 『ふれふれ なんだあめ こんなあめ』岩崎書店

物語のあらすじは「一年生になった女の子（わたし）が、下校時に雨が降っていたのでお気に入りの傘を開くと、骨が一本折れている。それを見た男の子が『おんぼろがさ かささしたら びっしょびしょ』とからかう。私は『へへんのへーん ひとりじゃ なんにも できない よわむし。ふたり そろって すってんころりん、パンツのなかまで どーろどろ。ふたり まるめて どろだんご』と心の中で叫んでやった。それから、いじめっ子なんかになんか負けないように『さんさん おひさん どこにいる わたしのこえを きいたなら あまぐも けちらし かおをだせ』と、大きな声で歌っていくと、次に犬が飛びついてきて、また傘の骨が一本折れてしまう。そこで、私は『おまえのしっぽに こむぎこまぶし…』と心の中で叫び…『さんさん おひさん…』と大きな声で…」と繰り返されていく物語。

ふれふれ
なんだあめ こんなあめ



この物語を読んでもらった M は、とても困った様子で「私、心の中で叫べない。叫ぶと声がでちゃう」と言った。M はこの時、悪口や非難など口にはしてはいけないことばは声に出さず心の中で叫ぶ。そうすれば悔しさや憤りなど無念を克服することができる。絵本を自己啓発の手段として活用する読書の手法を発見したと思われる。絵本の主題を自分へのメッセージとして受け止める読解力への発展性が確認できる。

この年齢期の子どもは、耳から入ってくる物語の状況と目から入ってくる絵が語る情報を頭の中で組み合わせ、物語が意図する主題を自分の糧として把握する力が付き始めている。

M の事例からも継続的な読み聞かせが登場人物の行動からその気持ちを自分自身に投影させ自己の問題として理解し解決する力となっていることが解る。

○ 話し合いからのメッセージの追究 — 読後の話し合いの意味 —

4~5 歳児にはさらに込み入った人との関係性や複雑な問題を主題とした内容の理解が可能になり、継続的な読書環境の中で読解力をつけた子どもたちは物語からのメッセージの読み取りができるようになる。

そこで、読み聞かせの後に話し合いの時間を持つことは、物語からのメッセージにさらに近づくアプローチとしての効果がある。

事例2. 『きこりとおおかみ』福音館

物語のあらすじは「冬の夕暮れ、きこりとおおかみさんのカトリヌが、すかんぼのスープを作っていた。そこにおなかをすかした狼がやってきた。きこりはとっさに『カトリヌ！こいつに、すかんぼのスープを、たっぷりいっぱいぶっ掛けておやり！』と叫んだ。おおかみさんは狼の頭に煮立ったスープを掛けた。狼はすっ飛んで森の奥に逃げて行った。それから1年がたち、きこりが森の奥で木を切っていると、やけどで頭のはげた狼が15匹ほどの狼を従えてやって来た。きこりはすばやく木に登る。やがて頭のはげた狼が木に前足を掛け立ち上がり、つぎの狼がその肩の上に乗り、最後に登ってきた狼は今にもきこりに届きそうになった。そのとききこりは声を振り絞って『カトリヌこいつに、すかんぼのスープを、たっぷりいっぱいぶっ掛けておやり！』と叫んだ。そのとたん一番下の頭のはげた狼が大慌てで逃げ出したので、上に乗っていた狼たちはばらばらと転がり落ちてしまった」という話。



以下、読後のMと母親のやり取りから、物語を分析し話し合うことの意味が見える。



M「この狼は、日本語が分かるの？」

母「人間のことが理解できるか、と言うこと？」

M「そう」

母「どうでしょうね。もし、理解できないとしたら、頭のはげた狼はどうして逃げ出したと思う？」

M「…、…、…」(考えている)

母「音だったらどうでしょうね」

M「どういうこと？」

母「あの足音は〇〇先生の足音だとか、下園時のチャイムは、もう帰りなさいの合図。

ことばの意味が分からなくても、あっ、あの時の音だ！と気づけば？」

M「わかったぁ～。叫び方を同じにして、思い出させた」

このように1冊の絵本を媒介に話し合うことは、自分の考えを膨らませていくヒントとなる。読み聞かせの後に物語について話し合うことは主題の読みとりの幅を広げ、物語をさらに深く楽しむ力となる。

読後の話し合いは読解力を深める一手段として効果的な手法である。9歳児に「きこりとおおかみ」を読んだ時、一人の男児が手を上げ「オオカミは人間のことが解るんですか」と質問した。すると他の子が「犬はわかるよ」と言った。その発言を受けて「それはペットの犬だろう」と他の子が言った。「このオオカミは野生だからわからないだろう」・「じゃあどうして、頭のはげたオオカミは逃げたの」と発言がつながり、その後「イントネーションだ」と、子ども達は話し合いから自分達なりの結論を導き出していった。

読後の話し合いは他者とのやり取りからさまざまな発想が導き出される。このように読後の話し合いにおいては M だけの問題ではなく、同年代の子ども達が物語からのメッセージを深く学び取る近道となっている。

○ 継続的な読み聞かせが育む読解力 — 幼年文学の読み聞かせ —

継続的な読み聞かせの環境にあった子は 6 歳前後で明解な内容の絵本を一人で読んで楽しめるようになってくる。一人読みを焦らず気に入った絵本の読み聞かせ行為が、一人読みへの準備段階として子どもの読むことへの好奇心を促すように思われる。

事例 3. 5 歳 11 カ月の M、140 ページの幼年文学を聞く

5 歳 11 カ月の夏休みに M は、「サケの子ピッチ」KTC 中央出版の挿絵を描いていた。

M はその夜「サケの子ピッチ」を読んでもらった。

物語は文体的に 10 歳頃対象の読み物に仕上げられている。粗筋は、その年一緒に生まれたサケの子ども達がお母さんを探しにベーリング海に旅立つ物語。

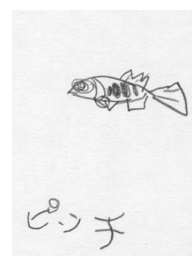
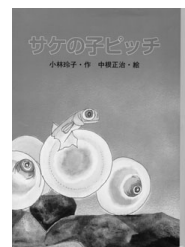
70 ページを過ぎた頃「もうやめて」と M は言った。「もう眠くなっ」と聞くと、「ルンル（ピッチの友達）、死んじゃうんでしょ。かわいそうだからもうやめて」と言った。

5 歳児の M には、ルンルが仲間の犠牲になって死んでいくことが、その場面が描かれている数十ページ以上も前に読み取れていた。次の朝、本を抱えて起きてきた M は最後まで読んでもらった。

この点においても自然界の原理原則を冷静に受け止め悲しみを乗り越える思惟が付き始めていることがわかる。

段階を踏んでの読み聞かせの継続性が 5~6 歳の子どもの把握力を育てている。一般的にはお話し会の読み聞かせに幼年文学はあまり取り上げない。しかし、身近な大人による家庭での読み聞かせにおいては、理解力に合った対象年齢以上の内容まで聞きとることができる。継続的な読み聞かせの意義がここにある。

さらに、この時期から一人読みに向かっての配慮をせずにいつまでも読み聞かせをすると、自分で読んで楽しむ力の育成が妨げられる。9 歳以降の子ども読書量の激減に歯止めがかからないと図書館からの報告もある。6 歳前後から自分で読む訓練の必要性がここにある。



2) 知識絵本の継続的な読み聞かせによる理解能力の成長段階

第1段階 0・1・2歳児における絵本遊び

知識絵本の読み聞かせによる効果とその発展性。

知識絵本の分野は広範囲にわたる。ここでは標識からルール分野へと進む継続性に絵本を絞って、その発展性と理解能力の発達の確認を試みる。

○ 子ども主体のブックコミュニケーション

子どもが興味を示す知識絵本の読み聞かせが、関連する絵本への広がりとその分野への好奇心を促す。

「対話的ブックトーク」のように大人が決めたテーマに沿って子どもと話し合うのではなく、子どもが興味を示した絵本からの広がりや、子ども自身が関連した分野へと発展していく。このような絵本の活用は身近な大人と1対1でのかわりや、子ども主体のブックコミュニケーションとなる。

事例1. 『しるし』ひかりのくに

乳児は動くものへの関心が高い。外出時の光や動き、音などが乳幼児の意識を対象物へと向かわせる。身近に設置された標識の名称や設置の意味を繰り返し教えることで標識に興味を持ち始める。

この時期は外出時に見たり感じたりすることをそのつどことばにして語りかける。ことばを音として受け止めた乳児はしだいにことばの意味を、体験を通し語意を把握したことばとして獲得していく。



事例2. 『マークのずかん』すずき出版

事例1からの発展として、外出時に道路に設置された標識の意味について話しかける。子どもはしだいに関連した絵本に興味を示すようになり、ルールやマナーについての絵本へと発展していく。



第2段階 2~3歳児の知識絵本への好奇心と把握力

ルールや責任など、社会規範へと進む発展性

子ども達はさまざまな分野の知識絵本に出会うことによって多くの情報を習得する。習得した情報は必要に応じ危険から身を守る手段として日常生活に活用されていく。

事例1. 『びかくん めをまわす』福音館 『がんばれ ごん』偕成社

M3歳の時、絵本『びかくんめをまわす』によって信号機の見方や交差点の渡り方を教えられていた。あるときMが「歩く人が見る信号機には黄色がないから青がびかびか（点滅）するんだね」と言った。それまでは絵本から得た知識で自動車向けの信号を見て道路を横断していたようだ。この時、Mは歩行者信号の青色の点滅の意味を自ら発見している。



第3段階 4・5・6歳児の一人読みへの準備段階として発展性

興味を持った絵本から関連のある絵本へと進む発展性。

絵本から知る楽しみや学ぶ楽しさを知った子ども達は知識絵本に興味を持ち始める。

図書館でのお話し会に参加するためにやっても、おはなし会に参加せずに興味のある絵本を読みふける姿をよく見かける。幼児向けの絵本には漢字にルビがつけられている。ひらがなが読めるようになった子は興味のある分野においては一人で読み進めていくことができる。

事例1. 『じぶんをまもろう みんなをまもろう』学研

『立小便しちゃいけないだって!?』ポプラ社

ルールや責任など、社会規範を追究するために同じ主題の『じぶんをまもろう みんなをまもろう』から『立小便しちゃいけないだって!?』に発展させていった。



知る喜びから自ら学ぶ楽しさへの発展性

ルールやマナーの分野の発展性と同じように、さまざまな分野の知識絵本の読み聞かせによって、子どもは自然科学や社会科学などの分野に興味を持ち、好奇心を育み自ら学ぶ楽しさへと発展していく。この傾向はMだけに現れる効果ではなくさまざまな分野の絵本を読み、多くの知識を蓄えた子どもはどの子も自ら学ぶ楽しさが育まれていく。

事例2. 『からっぽだっていっぱい』農文協

『いきをするのはなぜだろう』偕成社

Mは4~5歳のころから身近な自然に興味を示し始め、「これなあに？」としきりに訊ねるようになった。「からっぽだっていっぱい」に描かれた各ページの内容を確かめなければ納得できない様子で、「空気は冷えると重くなる」では夏の昼下がりに冷蔵庫の冷凍室を開け、白濁した零気が降下する様子確かめていた。

「すった空気とはいた空気 どこが違うのかな？」では、「空気は身体の



中でどんな仕事をしているの？」と聞き、母親を困らせたという。その後、自分の中でこだわり続けていたのだろう。絵本『いきをするのはなぜだろう』に辿りついた。そして、「身体の中に取り込んだ空気は、細胞で栄養を酸素（空気）で燃やしてエネルギーに変える仕事をしているんだね」と、解明されないままになっていた問題を数年後に自ら解決した。

継続的な読書によって導き出された結果である。

事例3. 化学『はんにんは塩水か？ — しんとう圧をやさしく科学する —』大日本図書

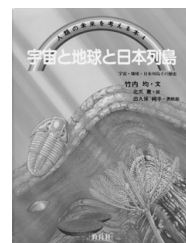
『小学生のおもしろ自由研究 ① はんにんは塩水か？』このシリーズは家庭で出来る実験が多く取り上げられている。あるとき双子の男の子A君とB君（5歳）が『みそ山のふんか』シリーズ②を母親と台所で実験し、「ほんとうに噴火したよ。B君はね。まばたきしたから見ていないんだよ」と嬉しそうに話した。



また、『はんにんは塩水か？』にはキュウリでの浸透圧の実験が紹介されている。M17歳の時、8歳下の従弟（9才）が『はんにんは塩水か？』の絵本とキュウリを用意してもらっているのを見て、「浸透圧の実験をするの？」と言った。「どうしてわかったの？」と聞くと、「その絵本。小さい時（5歳頃）に読んでもらったから」と答えた。自分が体験した時から12年が経過している。幼児期の読書や実験の体験が鮮明に記憶されていることが解る。

事例4. 歴史『宇宙と地球と日本列島』教育社

3人兄弟の末の男の子が5~6歳の頃。お話し会で『宇宙と地球と日本列島』を咀嚼しながら読み聞かせてもらっていた。その日の夕方、父親が帰宅すると、絵本『宇宙と地球と日本列島』を見せ、お話し会で聞いた通りに、よどみなく父親に説明したと言う。自分で読むとしたら小学6年生前後を対象とした絵本である。年上の兄弟のいる読書環境が年令以上の理解能力を育てていることが読み取れる。



○ さまざまな分野の情報の習得が意味するもの

絵本や体験を通して得た情報は考えをまとめるとき、必要な知識を取り出し考えを整える力となる。さらに、幼児期に一度取り込まれた知識は記憶に残り必要に応じて呼び覚まされる。このことから幼児期におけるあらゆる分野の知識絵本の読み聞かせは、子どもの理解能力を促す大きな力となる。

IV. 分析の結果

物語絵本の読み聞かせからの理解能力の発展性

第1段階 0・1・2歳児における絵本遊び

言語理解が十分でない乳幼児期では、絵を遊ぶかかわりのなかで、ピンポイントでの読解力が確認できる。(事例、『ぼぼぼぼ』)

第2段階 2・3歳児の語彙量に沿った読み聞かせの発展性

絵本の絵を読む遊びから先を予測する力や共感する力が、0歳からの絵本遊びの継続性によって育まれていることが確認できる。(事例、『あなにおちたぞう』)

絵本に実体験のイメージを重ねて聞けるようになる。(事例、『やこうれっしゃ』)

第3段階 4・5・6歳児の一人読みへの準備段階としての読み聞かせの発展性と継続性

物語の主題を自分へのメッセージとして受け止められる理解能力への発展が確認できる。(事例、『ふれふれ なんだあめ こんなあめ』)

知識絵本の継続的な読み聞かせによる理解能力の発展性

第1段階 0・1・2歳児における絵本遊び

身近な事物絵本への導きがことばの獲得につながり、絵本からの知識の獲得が好奇心を育てている。

第2段階 2・3歳児の語彙量に沿った知識絵本の読み聞かせ

子ども自身が興味を示した事物に関する絵本から、子ども主体のブックコミュニケーションとなり、関連性のある絵本への発展性へとつながっている。

第3段階 4・5・6歳児の一人読みへの準備段階としての絵本の選択

絵本から知る楽しみや学ぶ楽しさを知った子どもはあらゆる分野の知識絵本に興味を持ち始め関連する絵本へと進む発展性が認められる。

子どもの理解能力は継続的な読書によるあらゆる分野別への広がりによって深められていくことが、Mの読書記録と同様に恵まれた読書環境にあった子どもは等しく理解能力が培われている。

物語絵本によって育まれる理解力と知識絵本からの情報の蓄積は思考を支える双璧であり、どちらの分野が欠けても理解能力の育みを促すには十分ではない。

乳幼児の理解能力を促す一つの手法として絵本による読み聞かせに効果のあることは明らかである。ことのほか乳児期からの絵本によるかかわりが継続的な読書の発展性の中で理解能力を育む大切な時期であると考えられる。

V. 考察

Mの読書記録からも確認できるように乳幼児期の絵本とのかかわりが、子どもの理解能力や思考力を深めると同時にヒューマンティニーを高めていくと考えられる。

乳幼児期からの絵本による読み聞かせの過程が、子どもの知的好奇心を育み自分育てをし、読み聞かせによって生まれた子どもの判断力が、生活の中に表出していることも見逃してはならない。

母親にとっては、絵本が子育てのマニュアル書となり、読み聞かせを通して我が子の成長を確認することとなる。

よって読書とは、人が一人の人間として完全に近づくために用意された導き書であると考えられる。

VI. まとめ

- 幼い子どもは親が思っているよりはるかにわかる力、伝えようとする力を持っている。
- 子どもは絵本からことばの意味や使い方を学ぶ。
- 子どもは絵本を読んでもらう体験から、物語に込められた主題を次第に理解できるようになっていく。
- 絵本を媒介として話し合う中で子どもは考えを巡らし、自分なりの考えを導き出す力を育んでいく。
- 物語の主題を自分の問題として取り込んでいくことが出来るようになる。
- 物語の登場人物が体験する状況・経過・結末を共体験することによって、身の回りで起る出来事のおよそを把握できるようになっていく。
- 物語の登場人物の行動や言動を通して相手の気持ちや真意を理解する力が育まれていく。
- 知識絵本から自然科学・社会科学への好奇心が芽生え科学する力をつけていく。
- 物語の分野から精神文化を、知識絵本の分野から自然や社会の成り立ちを学んでいくこととなる。
- 絵本は親自身の子育てのマニュアルとして活用出来る。

以上のように絵本遊びや読後の話し合いを通して乳幼児は様々な分野の絵本から基礎知識を得ることで、さらに知的好奇心は深まり、自分で学ぶ楽しさを身につけていく。

今後の課題として子どもたちは今、知識は豊富に持っているが、頭で解っているだけで行動に移し自分で自分を制御し身を守ることが出来ない子が多いように思われる。幼い頃から大人に守られてばかりで主体的に自分を守る危機管理意識が育っていない子が多い。

乳幼児期からの読み聞かせで絵本から得た道徳観を体験の場で確認し、経験したことを絵本で再確認するといった双方向の作業を丁寧に繰り返すことで、子どもの心と頭の中にしっかりと取り込まれていくのではないかと思う。気遣い配慮といった人とのかかわりを潤滑に行う行動力を絵本の分野から学びとってもらいたいと願う。

参考文献

- 五味太郎（作・絵）1989『ぼぼぼぼ』偕成社
まっついりこ（作・絵）2001『じゃあじゃあびりびり』偕成社
てらむらてるお（ぶん）むらかみつとむ（え）1989『なにおちたぞう』偕成社
さかいまり（作・絵）1998『いいたくない』ひさかたチャイルド
梅田俊作/佳子（作・絵）1986『ふれふれなんだあめこなあめ』岩崎書店
フランス民話 山口智子再話 堀内誠一画『きこりとおおかみ』福音館
小林玲子（作）中根正治（絵）1996『サケの子ピッチ』KTC 中央出版
グリーンアイズ（レイアウト・コピー）永井順子（イラスト）1992『しるし』ひかりのくに
澤村岳志（アルファデザイン）山岡小麦（イラスト）1998『マークのずかん』すずき出版
松居直（作）長新太（絵）1966『びかくん めをまわす』福音館
岡村好文（文・絵）1991『がんばれ ごん』偕成社
横矢真理（監修）2007『じぶんをまもろう みんなをまもろう①みち』学研
阪上信夫（監修者）杉田英二（著者）長崎千恵子（四コマ漫画・イラスト・デザイン）
1989『立ち小便しちゃいけないんだって』ポプラ社
越智典子（文）倉島千賀子（絵）1990『からっぽだっていっぱい』農文協
藤森弘（構成・文）浅野りじ（絵）1996『いきをするのはなぜだろう』偕成社
佐藤早苗（作）伊東美貴（絵）1994『はんにんは塩水か？』大日本図書
竹内均（文）北爪薫（絵）1989『宇宙と地球と日本列島』教育社